
文系不良

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文系不良

【Nコード】

N1654K

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

世にも珍しい、本を愛する不良の良くんの、女の子と本への恋のモノガタリ

「よくも俺のトットちゃんを、傷モノにしてくれたな。」

ここは、とある不良ばかりの高校。

そこに一人、変わった不良がいた。

名前は良。

良という名の、不良である。

今、良の足元には無残にも破り捨てられた窓際のトットちゃんの文庫本がある。

「本なんて、また買えばいいだろ。」と、犯人。

「お前に、俺の気持ちは分かるめえ。俺はこのトットちゃんと小学校時代から、ずーっと一緒だったんだぞ。お砂場で一緒に遊んだんだぞ。」

「うるせえな。本ばか。」

「そんなに褒めても許してやんねーかな！」

「なな、何顔赤くしてんだよ。俺はけなしてるんだよ。」

その後、思春期特有の、不毛な殴り合いが10分続いた。良が勝った。

「文系なめんなよ。」

ちなみの良の学ランの下には、文庫本がぎっしり詰めてある。

体がつしりしているように見せかけるためと、殴られた時や、拳銃で撃たれたときに、身を守るためだ。

まったく本の読みすぎである。

なぜ、本と砂遊びしているようなシャイボーイが、不良になってしまったか、語らせていただこう。

良は、小中学校の頃は、初々しい真面目男子だった。

しかし、一つ欠点がある。

それは、授業を全く聞かずに本ばかり読んでいることだ。

よって成績は悪く、不良高校にギリギリで合格した。

良は、高校でも相変わらず読書家だった。

そんなある日、良が学校に置いておいた愛しき本たちが、不良の魔の手によって、メチャメチャにされるといふ事件が起こった。

良は愛しき本を守るため、不良になった。

幸いにも良の肉体は毎朝多数の本をリュックに詰めて登校しているため、程よい筋肉と体力を備えていた。

喧嘩は、不良が出てくるマンガを読みながら独り芝居や、特訓をしたので、十分にこなせた。

良は本を読むために生まれ、生き、死にたいと思うほど本を愛しているのだ。

そんな彼のささやかな楽しみは、放課後の文芸部だ。

図書室に行くだけでも幸せなのに、部活の時は数少ない本好き、本マニア、本おたくが集まるので、良は非常に楽しみだった。

その上、良が片思いしている文系女子、平泉さんに会えるということとも忘れてはならない。

「平泉さん。一緒に老人と海を読まないか。」

良が徹夜で考えた、平泉さん専用の話しかけ方である。

良は平泉さんにそそと近づき、上記のセリフを言った。

平泉さんは、吉里吉里人の文庫本から、目を離して、

「いいね。せっかくだから老人と海で二人芝居しようよ。」

「でも、老人と海の前半って、老人が、一人で漁に出るじゃないか。

二人でどう演じるんだ。」

「関が原君は、海の役をやればいいよ。だから隣で、波の音をやつててよ。」

関が原くんこと良は、懸命に海を演じた。

その隣で憧れの平泉さんが、熱演している。

俺は平泉さんを優しく包み込む、海になりたい。とか、思いながら、不良がざざーっと言っている。

新興宗教じみた、とてもシユールな光景だ。
平泉さんのハスキーボイスが耳に心地よい。
長編作品を選んでおいて正解だった。

星新一のショートショートと悩んだのだが、こっちにしておいてよかった。

俺は、本の虫に生まれてきてよかった。

本の神様、ありがとう、サンキュー、かたじけない、サンクス！

その日の帰り道。

良は不良に出会った。

「貴様は、本が好きなんだってな。」

「それがどうした。」

「この世にあるものは全て無駄だ。・・・お前もな！」

いきなり不良が殴りかかってきたので、昆虫図鑑でガードする。

「全て滅んでしまえばいいんだ！」

俺は八つ当たりされるほどの悪さはしていない。

「お前と本との愛を試してやる。」

こいつ、俺より変だ。

しばらく殴りあう。

「どうしてお前は、本をそんなに大切にしているんだ。」

「本は、俺の血だ！命だ！魂だ！」

「所詮本など、絵にかいたモチ。ロマンで腹は膨れねえんだよ！」

「じゃあ、お前は、ロマンが何か知っているか。」

「えっと・・・。」

不良は本気で悩んだ。

意外といい奴かもしれない。

「ロマンってえのはなあ、夢のことだよ。」と、不良。

「夢はドリームだろうが。」

「ドリームとロマンは同意義語なんだよ。」

俺たちは、話しつつ、ちよいちよい殴りあった。

「お前、本当はそれほどワルじゃないだろう。」と、俺。

「いいや。俺はワルだ。」

「頭が悪なだけだろう。」

不良が殴るのをやめて、俺に笑いかけた。

「俺は、やつと無駄じゃないモノを見つけたよ。」

「言ってみろ、ワル。」

「・・・友情。」

ワルは顔をりんごみたいに真っ赤にしていった。

これが、俺の親友、前田務との出会いだった。

務と俺は同じクラスだったので、翌日務に話しかけてみた。

務は、うさぎ型のまんじゅうを食べている。

リスがクルミを食べるような動作だ。

「こんなに可愛いうさぎも、食ったら無くなっちゃうんだぜ。」

お前の食べ方の方がかわいいよ。と言いたかったが、やめた。

「こんなに可愛くって、うまくても、売れ残るんだぜ。俺んちは和菓子屋でな。売れ残りを捨てるのはもったいないから、朝食代わりに、もらって食ってるんだ。」

「よく太らないな。」

「若者の燃焼力なめんなよ。お前も一つどう？」

務は机の上にピラミッドのごとく、うず高く積まれたうさぎまんじゅうの、てっぺんを指して言った。

俺は、うさぎまんじゅうを取って、外装のフィルムをめりめり剥がし、頭からパクリと食べた。

カスタードと白あんが混ざった甘味が、口の中を支配していく。そのくせ、さっぱりしていて、いくつでも食べられそうだ。

「どうだ。うまいだろ。」

「とんでもなくうめえや。お前の親は天才だな。」

務は、ハイエナのように飢えた他の不良にも、うさぎまんじゅうを配っている。

何としても全て消費したいのだろう。

うさぎまんじゅうをもらった不良は、子供みたいに喜んで、夢中で食べている。

「務。俺も、もっともらっていいか。」

「おう。好きなだけ持つてけ。」

俺は、平泉さんに、うさぎまんじゅうを食べてもらいたいと思った。平泉さんは甘党だ。

だから、きつと喜ぶだろう。

平泉さんが、甘いものを食べた時に見せる、ほんわか笑顔を見るのは、俺の生きがいだ。

俺は潰さないように、そつと、学ランのポケットにうさぎまんじゅうを入れた。

休み時間。

俺と務の雑談タイムだ。

「務は読書しないのか。」

「オレは、文字を見ると眠くなる種族だからね。」

「どんな種族だよ。」

「先祖代々そういう家系だから。本を読みたいとは思っただけだよ。」

「じゃあ俺が、読んだ本のあらすじを、務に教えてやるよ。」

「それなら眠くなくていいや。」

「うさぎまんじゅうの礼だ。」

楽しい授業は、小川を流れる笹舟のようなスピードで終わった。

そして、お待ちかねの文芸部の時間だ。

つぶれないように死守したうさぎまんじゅうを平泉さんに渡さないと。

ちなみに、机も鞆も、本で溢れ返っているので、ポケットしか入れる

所がないのだ。

緊張の面持ちで図書室に行くと、平泉さんが、いつもの席にいた。源氏物語を読んでいる。

「平泉さん、甘いもの、好きでしたよね。」

本から目を離れた平泉さんと、目が合う。

俺は、バレンタインチョコを渡す女子みたいにまごごした。

震える手で、平泉さんにうさぎまんじゅうを渡した。

「食べますか。」

「あつ！うさぎまんじゅうだ。わたし、ずっと食べ損ねてたんだ。ありがと。」

平泉さんは、うさぎまんじゅうを両手で優しく包み込んで受け取った。

俺の手に、平泉さんの、繊細な指が当たって、ドキドキする。

「でも、図書室は飲食禁止だから、後で食べるね。」

そう言つてにこりと笑う平泉さん。

その笑顔がちらついて、俺は読書に集中できなかった。

翌日。

「なあ、良。最近街で変な噂をきいた。」

友人の務が、自習の時間に、話しかけてきた。

「どんな噂なんだ。」

「赤いフードを被った男、通称赤ずきんと、銀髪で目つきの悪い大男、通称狼の二人が、不良狩りしてるらしいぜ。」

「そりゃ、タチが悪いな。おとぎ話の冒険じゃないか。」

「ちょうど下校時刻頃に現れるそうだから、気をつけないとな。」

「もし、遭ってしまった時のために、対策を立てよう。」

自習の時間が、いつの間にか、赤ずきん対策本部になっていた。

で、下校時刻。

俺と務は、アイドルは誰が年をごまかしているかの話をして、盛り

上がっていた。

そしたら、案の定、奴らに鉢合わせしてしまった。
二人でこっそり打ち合わせした通りに、くねくねした道を全力で走る。

「やべえな。あいつら、俺たちとは別格の不良だ。」と、俺。

「すごい殺気だったな。噂は本当だったんだな。」

壁をよじ登ると、務の家がある。

少しそこで休ませてもらう。

肩で息をする俺たちを尻目に、ししおどしが、かぼーんと、のんきに鳴る。

本当にこんな音で獅子が脅せるのだろうか。

なかなか広い庭だ。

手入れも行き届いている。

池に鯉だつて泳いでいる。

とにかくデラックスだ。

「お前んち、金持ちなんだな。」

「いやいや。そんなことはない。」

縁側で庭を觀賞しながら休んでいると、務の母さんが、お茶とたぬきまんじゅう（新商品。チョコ味）を持ってきてくれた。

たぬきまんじゅうも、うさぎまんじゅうに負けず劣らず美味だ。

「動物のまんじゅうって、他にも何かあるのか？」

「抹茶味のイグアナまんじゅう、つぶあんのねこまんじゅう、莓味のウーパールーパーまんじゅう、略してウパまん、こしあんの犬まんじゅう、しろあんの人間まんじゅう、キムチ入りのゴジラまんじゅうなどなど。」

「・・・ツツコミ所が多すぎて、笑っちゃうな。」

「何なら、売れ残りがあるから、全部食べてみるか？」

「お腹も空いたし、そうしようかな。」

意外にもゴジラまんじゅうも、おいしかった。

のんびりしているうちに、庭は、夜の闇に包まれていた。

「・・・そろそろ帰らないと。」

「またあいつらに遭うと危ないし、車で送ってやるよ。」

俺は、務が運転する車（もちろん免許はある）に乗って帰宅した。

夕食は全く食べずに、風呂に入る。

走り回ったから足がジンジンする。

本好きの俺でも、さすがに風呂の中では読書はしない。

一回やってみたが、本が湿り気で、ダメになるし、しまいには、浴槽の中に入水自殺（太宰治かよ）させてしまったので、トラウマになっている。

風呂から上がったら、読書しようと思ったが、疲れて頭に入らない。仕方なく眠ることにした。

抱きまくら代わりに、分厚い本を抱いて寝る。

抱いて寝る本は、長年の研究の末、広辞苑が一番だと分かった。

俺は、恥ずかしがる広辞苑の外箱とカバーをそっと、優しく外した。そして、思いつきり広辞苑を抱きしめた。

俺は、この広辞苑を苑ちゃんと呼んでいる。

「苑ちゃん、おやすみ。」

もちろん返事は、ない。

苑ちゃんの外箱とカバーは、寝床の近くに無造作に投げしておく。

苑ちゃんは、俺が長年抱いて眠っているため、すっかり俺の匂いが染みついている。

そして、俺の汗で、黄ばんでいる。

俺は、そんな苑ちゃんが平泉さんの次に好きだ。

いつも静かに俺の帰宅を待ってくれている。

分からない単語があった時、苑ちゃんに触れて、心とページを開けば、俺にしか聞こえない小声で教えてくれる。

なんていい子なんだろう。

今日も、苑ちゃんのおかげで、ぐっすり安眠できた。

そんな苑ちゃんに、ライバルの本が現れた。

知代ちゃんこと、現代用語の基礎知識だ。

知代ちゃんは、現代に詳しい。

カタカナ語も得意だ。

つまり、苑ちゃんとは逆のタイプの女の子、じゃなくって本だ。

俺はすっかり知代ちゃんに夢中になった。

そんな俺を、苑ちゃんは、本棚で静かに見守っている。

ある日、夢の中で苑ちゃんと、知代ちゃんが、俺をめぐって大喧嘩をした。

俺は止めに入った。

しかし、二人とも俺が見えていない。

俺は心を痛めつつ、目覚めた。

この大事件を務に話した。

「それは、どっちか一冊に決めなくちゃだめだ。そうしないと、二冊とも傷ついてしまう。」

「でも、俺には二冊とも必要なんだ。」

「お前なら、どっちが大切か、分かるはずだ。」

それが分からないから相談したのになあ。

悩んでいるうちに、文芸部の時間になった。

俺はこの悩みを部員に、話すことにした。

まずは、レア本マニアの吉岡にざっと語った。

「それはチミ、贅沢な悩みだなあ。」

吉岡が君という時、チミに聞こえる。

俺は吉岡をじっと見た。

「ワシなんかさ、欲しい本となかなか出会えずに、枕を涙で腐らせているのに。チミは欲しい本を手に入れて、一緒に寝ているだど！」

「羨ましいゾ。」

「枕が本当に腐るのか？」

俺はどうしてもきになってしまい聞いた。

「ああ。そうだとも。ワシの頭の栄養分と、涙の湿り気で、灰色の
エノキみたいなキノコが、もっさり生えたぞ。」

「も、もっさり!？」

想像すると、気持ち悪くなってくる。

「もっさりはいいいから、何かアドバイスをくれよ。」

「そうさねえ。二冊とも抱いて寝ればいいんじゃないかねえの？」

そう言っ吉岡は、初版のここを開いて、読み始めた。
どうもすつきりしない。

次は、ラブロマンス小説好きの高木（♫）に話した。

高木は、赤ぶち眼鏡を、人差し指でくいつと持ち上げて、冷静に言っ
た。

「お前、好きなひと、いないだろう。」

口の端を三ミリ曲げて、笑った。

眼鏡の奥の瞳は、完全に俺を見下している。

「いる!きちんという!」

「じゃあ誰か、言ってみよ。」

同じ空間に、愛しの平泉さんがいるので、言うわけにはいかない。

「お前になど、教えるものか。」

「ほほう。そう来るか。」

高木は、笑顔を崩さず、上から目線でモノを言う。

「で、お前は、どうしたらいいと思う？」

俺は、怒りを込めて言った。

「さあね。自分で考えな。」

高木は、鼻で笑って言った。

「それだから、お前は彼女ができないんだよ。」

俺は、怒りを封印して、あえて、憐れむような声で囁いた。

高木は、

「ボクは、お前みたいに素直じゃないんだよ。ボクだって悩んで
るんだよう。」

と、言っただけ泣き出しそうになった。

「ごめん。そこまで苦しんでいるとは知らなかった。」

高木はしばらくしてから、

「うそぴょーん。ボク、彼女いるもん。」

と、明るく言ったので、一発殴っておいた。

ラブロマンスマニアだから、参考になるようなことが聞けるだろ
うと思った俺がバカだった。

次は、口では言いがたい本おたくのナナコさんに相談した。

「関が原君は、本に恋してるのね。」

「これって恋なのか。」

「恋よ。きっとそうよ。」

ナナコさんは、目を輝かせ、ガッツポーズで絶叫した。

「恋の対象を人間に移せばいいのよ。」

「でも、どうやって。」

「関が原君の好きな本を、人にプレゼントすれば、プレゼントした
人を好きになるわ！きっとそうよ！本と人が合わさって、ラブが生
まれるわ！まずは、務君に本を渡せばいいわよ。」

「そうしたら、俺が務に惚れちゃうじゃんかよ！」

「それでいいのだ。」

「よくない！」

どうして文芸部には、まともな人間がいないのだろう。

これなら自分で考えた方がいいかもしれない。

しかし、俺は今、とにかく誰かに相談したくてたまらない。

次は、歴史マニアの堀田君に話した。

「ふむ。それは難題なり。お奉行所にも行かねば、到底解決は不可能なり。」

「奉行所なんて、ねえよ。」

「では、少し話を変えよう。君は先ほど、好きなおなががいると申したな。」

「・・・おう。」

「本当にそのおながが好きなら、本に惚れぬはず。」

俺はぎくつとした。

痛いところを突かれた。

確かに、俺の平泉さんへの想いは恋というより、憧れみたいなものかもしれない。

それに、恋愛小説を読む限り、恋とはもっと激しいものであるはずだ。

悩みの内容が180度、いや、572度変わってしまう。

「そうだよな・・・。」

俺は、平泉さんを見て、考えた。

本当に平泉さんが好きなのか？

平泉さんを見るたびに感じる、甘い胸の疼きは、恋じゃないのか？

平泉さんに話しかけるときの、緊張感も、嘘なのか？

平泉さんが夢に出てきたときの喜びと、夢だと分かった時のやるせなさは恋じゃないのか？

恋ってなんだよ。

「ナナコさん、恋って何だ？」

「そうねえ、夢とロマンと青春の大冒険ってどこかしら。」

「・・・わかんねえ。」

「平泉さんなら、分かるかもよ。」

俺は、ギクツとした。

ナナコさんは、俺が平泉さんに惚れているのを、分かっているのか
もしれない。

「・・・平泉さん、恋ってなんですか。」

「コイ、ねえ・・・。誰かが誰かを求める気持ち、かな。」

「平泉さんは、恋してますか。」

「どうしたの？ 関が原君。なんか変。」

しまった。平泉さんに嫌われてしまったかも。

「俺は、好きな人がいて・・・。」

「そっか。きつと関が原君なら、うまくいくよ。」

平泉さんは、輝く笑顔で、話を締めくくった。

「まったく、平泉さんはドンカンなんだからあゝ。」

ナナコさんは心底面白そうに言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1654k/>

文系不良

2010年10月26日09時22分発行